
MOON-4 夜叉 2 < 1 2 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2 < 1 2 >

【Nコード】

N 8 0 3 1 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

3年ぶりに叔母の市子と再会した裕希。市子なら何もかも話せる気がして今までの経緯を離す裕希だったが――

MOONシリーズ第4弾『夜叉 2』第3話です。

3・秀・1（前書き）

今週は忙しいです。。。

3・秀・1

篠原市子は父 雅人と10歳違いの姉だった。今年、45を迎えるというがどう見ても27・8歳にしか見えな
い。

裕希が母を亡くし小学生となり寮に入るまで、市子が不在がちの父に代わり裕希を育てていた。

雅人にも何度か再婚の話はあったが、皆雅人自身が亡くなった裕希の母の事を忘れられず断り続けて来た。

市子は今、雅人の片腕となり欧州の支店長としてヨーロッパ各国を訪問していた。

日本に帰る事もそうめったにない。

その市子が今、ここにいる。

昔と変わらぬ、容貌のまま。

コン コン

裕希は2階の彼女の部屋を訪れた。そこはかつて裕希の母が使っていた部屋。

市子のお気に入りダージリン・ティを持ち、ドアを開けると、

「裕希かえ？おいで。」

優しく微笑んだ。

「夜遅くにごめんね、市子叔母さん。」

裕希はそう言い、後ろ手でドアを静かに閉じる。

時刻はもう夜の10:00を廻っていた。

「紅茶入れてきたんだ。」

彼は嬉しそうに言った。

市子と会うのは3年ぶりである。

「いい香りだの。」

ティー・カップを受け取り、赤い刺繍を裾に施した着物を着た市子は、「F & amp; Mだね。」

「そう。」

化粧台の前に座る市子の傍らに椅子を移動させ、裕希は座った。

「叔母さんのお気に入り。ちゃんとイギリスから取り寄せたものだから。執事の笹がとっておいてくれるんだよ。いつ、市子叔母さんがこの家に帰って来てもいいように。」

「そうよっじゃの。」

と、広い室内を見渡し、「何もかも前に来た時のままだしのにこり、と微笑む。

「でも、叔母さん、本当に歳とらないよね。」

「篠原家の人は皆年齢不詳が多いからの。そなたの父といい。ダージリンを口にする市子。満足気な表情だった。

「でも、どうして日本に？」

裕希も暖かいそれを飲み、尋ねた。「ユーロ、今落ちてるじゃん。大丈夫なの？」

「篠原財閥には大勢のブレンがいる。経営学者や経営生態学者や。」

市子は、紅茶を飲みながら、「たかが、1カ月、支店長が日本に戻った所で柱が揺らぐ『組織』ではないぞ。人材には事欠かない。」

「1カ月？」

パジャマ用のスウェット・スーツに着替えた裕希は、「じゃ、1カ月この家にいてくれるの？市子叔母さん！」

はしゃぐ裕希。

「そうじゃ。」

市子も優しく微笑む。「雅人は欧米視察の為に暫く留守をするという連絡があった。そこで裕希の面倒を見てほしいとの連絡があったの。」

「また、父さん『出張』か……」

軽い溜息をつく裕希。

「何をしよげておる。今まで学校の寮で友達と仲良くやっていたんだろ？雅人の事も忘れて。」

「・・・・・・そうだけど。」

裕希の表情が少し曇った。

学校に行っても、惇に部活を誘われてもどうしてもその気にならない。

心の憶測に『和人』の存在があった。

そして、彼らと暮らしてきたこの2年間の思い出が――

ふいに、裕希は口をつぐんだ。

「どうした？裕希。」

『どうした？裕希。』

何故か・・・・・・市子の中に和人の面影が宿っている。

「何か大切なものを失くしたのかえ？」

カップを化粧台の上に起き、市子は静かに尋ねた。

「・・・・・・うん。」

裕希は両手でカップを握りしめたまま、

「俺さ・・・・・・大切な人を失ったんだ。でも、相手はとも俺の力じゃ倒せない奴らで―――ただね、俺、その人たちを取りかえしたくて。」

「そう。」

「俺の力で出来るかな、って。」

「その大切な人というのは、裕希と一緒に暮らしてた人たちの事かえ？」

「え・・・・・・」

裕希は目を丸くした。「・・・・・・どうして市子叔母さん。」

「雅人にはちゃんと連絡はとっていたらし学校へもきちんと通っていた。だけど居場所は不明―――雅人は心配していたのだぞ。」

「うん、判ってる。」

「これでもお前の事を理解しているつもりだぞえ、裕希。良かったら、話してごらん。何かいい案が浮かぶかもしれない。」

と、言っても相手は普通の人間の市子。

誰が吸血鬼だの狼男だの『闇』や『光』の世界を理解できるだろうか。

「うん．．．．．」

裕希は多少ためらった。『夢』と笑われてもおかしくない。

彼は紅茶を口にした。

「そんなにあてにならぬか？私は。」

「そんなことないよ！」

裕希は強く否定した。「市子叔母さんなら何でも理解してくれるって、

判ってくれるって思ってる。」

夏の暑さをしのぐために、テラスへの窓は開け放っている。

白いカーテンが夜風に大きく揺れた。

「俺、この2年間新宿で『居候』してたんだ。」

裕希は語り始めた。「学校が嫌になった訳じゃなくて自分のやりたい事を見つけたくて。守りたいものを見つけたくて。」

「そうか。」

「その時出逢ったのが、和人と秀さんと朝子さんっていう人。家出少年にも関わらず一緒に暮らしてくれることを受け入れてくれたんだ。」

「ふむ。」

「でね、その和人って人は――市子叔母さんは信じないと思うけど吸血鬼一族の長で、秀さんは狼男、朝子さんは和人の『血』の提供者で、九桜っていう人は『人間の世界』をも統べようとする和人と同じ位強い『帝王』って呼ばれてる人でね。」

裕希はそこで一度言葉を区切り、「連続通り魔事件が三カ月前に多発してたでしょ。あれ、九桜を失った吸血鬼たちの仕業なんだ。」

市子なら何でも話せる．．．．．

そんな気がして、裕希は今までの経緯を全部話した。

「では、その和人っていう人が九桜の直系とかいう桜に倒されて

しまったんだね。」

市子は真剣な眼差しだった。

「うん。」

裕希は頷き、少し哀しげに、「俺、いっぱい和人に優しくしてもらったのに・・・秀さんにも朝子さんにも。俺、ただの家出少年だったんだよ。でも、深い事情も聞かないで、学校には行くこと、父さんにも連絡を条件と一緒にマンションで生活させてもらったんだ。」

「それで」

市子は目を細め、「裕希はその人たちから何を学んだ？」

「よくわからない、正直言つて。」

裕希は視線を白いカーテンが摩くテラスに視線を移し、「わからないけど」

そこで、表情が真剣になる。

「わからないけど、今は桜を倒して和人と秀さんと朝子さんを取り戻す事しか頭にないんだ。」

「そうかえ。」

市子は満足気に笑った。「なら、それで十分ではないか。取り返せばいい・・・だが、もしかしてそれは裕希の命を賭けたものになるのかもしれないぞ。」

彼女の黒い瞳が輝いた。「それでもかえ？」

「それでも。」

裕希は断言した。「みんな俺の大切な人たちだもの。それに」

『たかが人間ごときに』

裕希の脳裏を桜と榊の姿が横切る。

「人間だからこそ出来る事だってある。」

「・・・」

暫しの沈黙が室内に訪れた。

「では」

市子は微笑した。「それを忘れないように。人は大切なものを見つけた時こそ、強くなれる。そう信じればいい。」

「市子叔母さん……」

「さあ、裕希。もうPM11:00だぞ。」

市子は部屋の壁にかかっている柱時計に目をやった。「明日は学校は？」

「第2土曜だから休み。」

「そうか。」

市子は微笑し、「明日は家にいるがいい。ひよつとして誰かが尋ねてくるやもしれぬ。」

「え？誰。」

「来てからのお楽しみ」

と、悪戯気な微笑を浮かべ、「もしかしたら裕希の力となってくれるかもしれぬぞ。」

「……誰だろう。」

「家の者にホット・ミルクを持ってくるように伝えておくから今日は安心してお休み、裕希。『光』と『闇』の話。」

市子はそこで一呼吸置き、「まんざら空想ゆめの話ではないぞ。」

「市子叔母さん。」

彼女の雰囲気ふんいきが少し変わった。

その黒い瞳は裕希ではなく、もっと遙か遠くの『何か』を見つめているようだった。

3・秀・1（後書き）

ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8031m/>

MOON-4 夜叉2 < 1 2 >

2010年10月8日14時52分発行